足関節果部骨折の術後成績検討

今給黎総合病院整形外科

溝 口 成 朋・野 澤 洋 平
児 玉 太 郎・新 門 裕 三
鬼 丸 高 茂・今給黎 尚 典
長 野 芳 幸

Operative Treatment of Malleolar Fractures of the Ankle

by

Narutomo Mizoguchi, Youhei Nozawa, Taro Kodama,
Hiromi Shinkado, Takashige Onimaru, Takanori Imakiire
and Yoshiyuki NaganoDepartment of Orthopaedic Surgery,
Imakiire General Hospital

Forty-three patients with malleolar fractures of the ankle were treated surgically. Fractures were classified into SER type, SA type, PER type, PA type as defined by Lauge-Hansen. The clinical results according to Burwell were good in 36 cases, fair in 5 cases, poor in 2 cases. Anatomical reduction significantly affected the clinical results.

Key words : ankle fracture (足関節骨折), surgical treatment (外科的治療), clinical result (治療成績)

はじめに

足関節果部骨折は日常の診療でしばしば経験する外傷で近年積極的に手術が行われている。今回、我々は当院における足関節果部骨折の術後成績について検討したので報告する。

対象および方法

対象症例は足関節果部骨折の診断で手術を行った男性 30 例、女性 13 例、計 43 例で、受傷時年齢は 14~80 歳 (平均 42.6 歳)、経過観察期間は 4~70 ヶ月 (平均 38.2 ヶ月) である。受傷原因としては、交通事故が 16 例 (37.2%) と最も多く、スポーツ外傷、転倒、転落などがあり、この中には労災事故も含まれていた。方法は受傷時骨折型を Lauge-Hansen¹⁾ の方法を用い分類し、術後整復状態及び臨床成績は

Burwell²⁾ の基準を用いた。又、自己評価はアンケート調査に基づき評価した。

結 果

骨折型を Lauge-Hansen の方法を用いて分類すると SER 型が 37.2% と最も多く、SA 型 7.0%, PER 型 23.3%, PA 型 20.9%, その他 11.6% であり、SER, PER 型では stage の高いものが多かった。

術後整復状態を Burwell の X 線評価基準を用いて評価すると Anatomical 32 例 (74.4%), Fair 6 例 (14.0%), Poor 5 例 (11.6%) であり、骨折型と術後 X 線評価との関係では、SER 型にやや整復の困難な症例が多かった (図 1)。

術後 X 線評価と臨床成績の関係では、解剖学的整復の得られたものは Good の成績を示すものが多く、整復度と臨床成績はほぼ一致していたが解剖学的整復

図1 骨折型と術後X線評価

図2 術後X線評価と臨床成績

図3 アンケートによる自己評価

が得られたにもかかわらず臨床成績が, Fair, Poor の症例もあった (図2)。

アンケートによる自己評価では, 満足 38 例, 不満足 5 例で, 88.4% に満足を得ていた。不満足群では, 歩行時痛, 運動時痛などの痛みに関するものが, 特に多く自己評価の不満足の原因となっていると思われる (図3)。

症 例

17 歳 女性 転倒し, 受傷した。骨折型は SER-IV 型で手術を行ったが, 術直後の整復度は Good であった。5 ヶ月後のレ線では脛腓間の離開, Sudeck 骨萎縮が認められ運動時痛, 不安定感を訴えている (図4)。

考 察

足関節部骨折の予後に影響を与える因子には骨折型, 整復度, 手術方法, 後療法, 合併症, 年齢, 受傷原因等が挙げられる。今回我々は最も影響を及ぼすと考えられる整復度について検討した。当院においても他の報告同様, 解剖学的整復を得ることが重要であり,

特に外果部の整復と距骨偏位の整復が重要であると考えられる。しかし整復度と臨床成績が一致しない症例もあり, 他の因子の関連が考えられる。我々の症例では開放骨折や高度脱臼など軟部組織損傷の高度な症例では, 解剖学的整復を得ても成績の悪い症例があった。又, アンケートによる自己評価では疼痛による不満足例が多く, 可動域, 不安定感, 腫脹については我々の予想より不満足の原因になっていなかった。脛腓間の固定については, IOL, IOM 断裂例を原則として治療しているが, 症例のように SER-IV 型で脛腓間を固定しなかったもので, 術後脛腓間の離開が出現し, 成績不良となった症例もあり, 今後, 脛腓間固定の原則を検討していく余地があると思われる。

ま と め

- ①足関節部骨折 43 例について術後成績を検討した。
- ②解剖学的整復度と臨床成績は, ほぼ一致していた。
- ③アンケートによる自己評価の検討と脛腓間の固定について述べた。

図4 症例 17歳 女性

a. 受傷時

b. 術直後

c. 術後5ヶ月

参考文献

- 1) Lauge-Hansen, N: Fracture of the ankle, II, combined experimental-surgical and experimental roentgenologic investigation. Arch. Surg., 60 : 957-985,

1950.

- 2) Burwell, H.N., et al.: The treatment of displaced fractures at the ankle by rigid internal fixation and early joint movement. J.Bone and Joint Surg., 47-B : 634-660, 1965.